

## 定住に繋げるための 情報発信を 志々地区の取組

ふるさとへ帰省できない人、長らく離れている人へ、志々地区の情報を届けたい。

志々地区の住民で組織する「わっしょい志々会」では、出身者へ地区の情報が詰まったふるさと便「志々

は元気です」を送る取組を始めました。

デジタル社会の中、あえて紙の情報誌を発送することにこだわり、志々地区の風景を絵葉書にしたものを同封するなど、ふるさとへのぬくもりを感じてもらえるよう工夫しています。インターネットによる情報発信も行っていますが、紙媒体はじっくり目を通してもらえるという良さがあり、両方を使い分けています。



ふるさとへのぬくもりも一緒に届けます



志々地区を盛り上げる！わっしょい志々会の皆さん

この取組は、出身者から出身者へ口コミで広がり、「あの人にも届けてあげてほしい」といった声も聞かれるようになりました。

志々地区では、Uターン希望者に対し、移住するための資金を支援するなど、地区独自の定住促進の取組を進めています。出身者に積極的に情報を発信することで、田舎暮らしに関心のある人に情報を届けたいという想いもあります。

「現在の発送先は、比較的年配の人が多いですが、その人たちの子や孫、交流している人などが志々に興味を持ってくれて、定住につながるべうれいですね」と、わっしょい志々会のメンバーは話します。

やみくもに情報を発信するのではなく、定住という次の展開を見



谷地区の未来を見据える谷自治振興会の皆さん

谷地区では、コロナ禍前には隔年で、谷小学校の卒業生会を実施していました。多くの出身者が集まり交流していましたが、ここ数年は開催できない状態が続いています。

## 助け合える 地域の実現に向けて 谷地区の取組

据えることで、本当に届けるべき情報が見えてくる。実現したい未来を見据え、志々地区は取り組んでいます。

このような状況の中、谷自治振興会では、出身者との関係を希薄にさせたくないという想いで、地区の情報誌を届ける取組を始めました。

今年発送した便では、「ふるさとと谷との関わりについて」という内容の

アンケート用紙も同封しました。過疎化が進行し、地区を支える担い手が不足する中、今後の出身者との交流のあり方を模索するためです。同時に、地区住民に対してもアンケートを実施。普段の生活の中で困っていることなどを調査しました。

「地区住民が困っていることと、出身者がふるさとのために協力したいと思っていることを、うまくつなげることができれば」。そんな未来を思い描きます。

谷地区では、令和2年に地域計画「谷未来ビジョン」を策定しました。これからの地域づくりの方向性を示した計画ですが、高齢化や人口減少により、地区住民だけでは計画を進めることが難しくなっています。

「出身者にもぜひ関わってほしい。自分たちが楽しく面白く活動していれば、やってみようかなという気持ちになる人がいるかもしれない。一人一人でも関わってくれる人が増えれば」。出身者と地区住民が、うまく関わり合いながら進める地域づくりの実現に向けて、谷地区は動き出しています。

出身者にも谷笑楽校の芝張りを手伝ってもらいました

## アンケートの 調査分析を 担当



島根県中山間地域研究センター  
主任研究員  
あづま 良太さん

近年、自然災害や新型コロナウイルスの影響により、人と人との関係性に大きな変化が求められるようになりました。安心して暮らしていくためにはどうしたらよいか考えたときに、重要となるのが、より親密な関係で支え合う「支え愛」です。しかし、人口減少が進む中、地域の中だけの「支え愛」では限界があります。そこで必要となるのが、地域外の人との関わりです。

Uターンが増えればよいですが、アンケート結果からもわかるように、なかなかUターンまではできない人が多い。そうすると、それぞれの暮らしをしながら関わるのが現実的です。アンケートの自由記述欄には、ふるさとへの想いがあふれていました。この人たちとの連携が、これからの中山間地域が元気であるた

めの原動力になると思います。アンケートの「ふるさとで思い浮かべる範囲」という項目で最も多かったのが、各地区(志々・頓原・来島・赤名・谷)でした。この結果からも、地区単位で働きかけることが、出身者に一番響くのではないのでしょうか。志々地区や谷地区のような取組が広がればと思います。

## ともに守る、 ふるさとの未来

それぞれの事情により、ふるさとに帰ることができない。でも「離れていてもつながりを維持して、実家や地域を支えたい」という想いを持つ

ている出身者はたくさんおられます。そして飯南町に住んでいる私たちも、「このふるさとを守りたい」という想いは同じです。

お互いが必要としていることを理解し合い、うまく補完し合う関係ができれば、目指すべき共通の未来が見えてくるのではないのでしょうか。